

## 昔も今も子どもは子ども

松本春野

イラストレーター／絵本作家



昨年一二月、山田洋次監督の映画「おとうと」のポスターを描いたことがきっかけとなり、私は初めての絵本を出版することができました。舞台は、今から五〇年前

の大阪。映画の主人公となった吉永小百合さん演ずる姉・吟子と笑福亭鶴瓶さん演ずる弟・鉄郎の子

ども時代を創作した物語です。

この『絵本おとうと』が世に出たからというものの、「松本さんは、昔ながらの温かい家庭に育ったから、こんな絵本が作れたのですね」と感想をいただくことが増えました。そんなとき私は一瞬言葉に詰まってしまうのです。

そんな読者の期待とは裏腹に、私は東京生まれの東京育ち。両親は共働きで、自分が描いた絵本とはかけ離れた世界で育ちました。もちろん世間で批判されがちな「現代っ子」の側面も十分に持ち合わせていると思います。もし一つ、私の生い立ちの中で「昔ながら」の点を挙げるとするならば、二人の姉と弟に挟まれ、今では珍しい賑やかな姉弟関係の中ですくすく育ったということだけ。

子ども時代、母も父も忙しく、子どもたちより早く家に帰ることは滅多にありませんでした。両親は保育ママさんや保育園、学童クラブといった公的な機関に加え、親切な方々に支えられながら、家事も育児も夫婦で分担し、なんとか四人の子どもたちを育てあげま

した。

たまの休日は、朝寝坊の母に代わって、朝食作りは父の仕事。その間母は、ベッドの中で新聞を広げて、寝ぼけ眼で授業を始めます。気になった記事子どもたちに音読させては、漢字の読み方をチェックしたり、意見を言わせたり。

母に褒められたくて、朝から私たち姉弟は大きな声を競い合うように張り上げたのをよく覚えています。

両親共々家にいる時間は「昔ながらの」家庭よりもずいぶん少なかったかもしれないけれど、二人は昔とは少々違った自分たちのやり方で、四人の子どもたちと真剣に向き合おうとしてくれていました。

「どうして昔の子どもが描けるのですか？」と聞かれると、私は

「絵本おとうと」 新日本出版社



決まっただけこう答えます。「それは私が鉄郎と何ら変わらない子ども時代を送ったからなんです」と。家族の形、周りの風景は違っても、大人にしっかりと見守られながら、日が暮れるまで外を駆け回り、大笑いしたり、うおんうおん泣きわめいたり、そんな子ども時代を私自身も送ったように思います。

遊び場は土からコンクリートへ、いたずらの方法や身につけるものもずいぶん変化したかもしれませんが。けれど、自分と鉄郎を比

べてみて改めて思うのは、いつの時代も子どもたちの心は変わっていないのでは、ということ。そんな風に考えると、今の子ども社会が抱える問題も解決不可能ではないように思えてくるのです。

昔を懐かしみ、今の状況にただ背を向けるのではなく、しっかりと前を見据え、子どもたちに心を寄り添わせながら、辛抱強くともに生きていくことで世の中は少しずつ変わっていくのではないのでしょうか。

そんな淡い希望を抱きながら、私はこれからも子どもたちを描き続けていこうと思っています。

『絵本おとうと』原画展

ちひろ美術館・東京 図書室

三月二日(火)～五月九日(日)

東京都練馬区下石神井四一七一一